

温泉

梶井基次郎

青空文庫

断片 一

夜になるとその谷間は真黒な闇に呑まれてしまう。闇の底をぶうごうと溪たにが流れている。私の毎夜下りてゆく浴場はその溪ぎわにあつた。

浴場は石とセメントで築きあげた、地下牢のような感じの共同湯であつた。その巖がんじょう丈な石の壁は豪雨のたびごとに汎濫する溪の水を支えとめるため、その壁に削くり抜かれた溪ぎわへの一つの出口がまた牢門そっくりなのであつた。昼間その温泉ひたに涵ひたりながら「牢門」のそとを眺めていると、明るい日光の下で白く白

く高まつている瀬のたぎりが眼の高さに見えた。差し出ている楓かえでの枝が見えた。そのアーチ形の風景のなかを弾丸のように川鳥かわうすが飛び抜けた。

また夕方、溪ぎわへ出ていた人があたりの暗くなつたのに驚いてその門へ引返して来ようとするとき、ふと眼の前に——その牢門のなかに——楽しく電燈がともし、濛々もうもうと立ち罩こめた湯気のなかに、賑やかに男や女の肢体が浮動しているのを見る。そんなとき人は、今まで自然のなかで忘れ去っていた人間仲間の楽しさを切なく胸に染めるのである。そしてそんなこともこのアーチ形の牢門のさせるわざなのであった。

私が寝る前に入浴するのはいつも人々の寝しずまった真夜中で

あつた。その時刻にはもう誰も来ない。ごうごうと鳴り響く溪の音ばかりが耳について、おきまりの恐怖が変に私を落着かせないのである。もつとも恐怖とはいうものの、私はそれを文字通りに感じていたのではない。文字通りの気持から言えば、身体に一種の抵抗リフラクションを感じるのであつた。だから夜更けて湯へゆくことはその抵抗だけのエネルギーを余分に持つて行かなければならぬといいつも考えていた。またそう考えることは定まらない不安定な、埒らちのない恐怖にある限界を与えることになるのであつた。しかしそうやって毎夜おそく湯へ下りてゆくのがたび重なるとともに、私は自分の恐怖があるきまつた形を持っているのに気がつくようになった。それを言つて見ればこうである。

その浴場は非常に広くて真中で二つに仕切られていた。一つは村の共同湯に、一つは旅館の客にあててあつた。私がおのどちらかにはいつていると、きまつてもう一つの方の湯に何かが来ている気がするのである。村の方の湯にはいつているときには、きまつて客の湯の方に男女のぼそぼそ話しをする声聞きこえる。私はその声のもとを知っていた。それは浴場についている水口で、絶えず清水がほとばしり出ているのである。また男女という想像の由よつて来るところもわかつていた。それは溪の上にだるま茶屋があつて、その女が客と夜更けて湯へやつて来ることがありうべきことだったのである。そういうことがわかつていながらやはり変に気になるのである。男女の話声の水口の水の音だとわかつて

いながら、不可抗的に実体をまとい出す。その実体がまた変に幽霊のような性質のものに思えて来る。いよいよそうなつて来ると私はどうでも一度隣の湯を覗いて見てそれを確めないではいられなくなる。それで私はほんとうにそんな人達が来ているときには自分の顔が変な顔をしていないようにその用意をしながら、とりあいの窓のところまで行つてその硝子戸ガラスを開けて見るのである。しかし案の定なんにもいない。

次は客の湯の方へはいつているときである。例によつて村の湯の方がどうも気になる。今度は男女の話声ではない。気になるのはさっきの溪への出口なのである。そこから変な奴がはいつて来そうな気がしてならない。変な奴つてどんな奴なんだと人はきく

にちがいない。それが実にいやな変な奴なのである。陰鬱な顔を
している。河鹿かしかのような膚をしている。そいつが毎夜極った時刻
に溪から湯へ漬かりに来るのである。プフウ！ なんとという馬鹿
げた空想をしたもんだらう。しかし私はそいつが、別にあたりを
見廻すというのでもなく、いかにも毎夜のことのように陰鬱な表
情で溪からはいつて来る姿に、ふと私が隣の湯を覗いた瞬間、私
の視線にぶつかるような気がしてならなかったのである。

あるとき一人の女の客が私に話をした。

「私も眠れなくて夜中に一度湯へはいるのですが、なんだか気味
が悪るござんしてね。隣の湯へ溪から何かがはいつて来るような
気がして——」

私は別にそれがどんなものかは聞きはしなかった。彼女の言葉に同感の意を表して、やはり自分のあれは本当なんだなと思ったのである。ときどき私はその「牢門」から溪へ出て見ることがあった。轟々たる瀬のたぎりは白蛇の尾を引いて川下の闇へ消えていた。向こう岸には闇よりも濃い樹の闇、山の闇がもくもくと空へ押ししのぼっていた。そのなかで一本棕むくの樹の幹だけがほの白く闇のなかから浮かんで見えるのであった。

これはすばらしい銅板画のモテイイフである。黙々とした茅ぼうお屋くの黒い影。銀色に浮かび出ている竹藪の闇。それだけ。わけ

もなく簡単な黒と白のイメージである。しかしなんといいあらわしがたい感情に包まれた風景か。その銅板画にはここに人が棲んでいる。戸を鎖し眠りに入っている。星空の下に、闇黒のなかに。彼らはなにも知らない。この星空も、この闇黒も。虚無から彼らを衛^{まも}っているのは家である。その忍苦の表情を見よ。彼は虚無に対抗している。重圧する畏^い怖^ふの下に、黙々と憐れな人間の意図を衛^{まも}っている。

一番はしの家はよそから流れて来た浄瑠璃語りの家である。宵のうちはその障子に人影が写り「デデンデン」という三味線の撥音と下手な嗚咽の歌が聞こえて来る。

その次は「角屋」の婆さんと言われている年寄っただるま茶屋

の女が、古くからいたその「角屋」からとび出して一人で汁粉屋をはじめている家である。客の来ているのは見たことがない。婆さんはいつでも「滝屋」という別のだるま屋の囲爐裡の傍で「角屋」の悪口を言つては、硝子戸越しに街道を通る人に媚を送つて
いる。

その隣りは木地屋である。背の高いお人好の主人は猫背で聾である。その猫背は彼が永年盆や膳を削つて来た刳物台のせいである。夜彼が細君と一緒に温泉へやつて来るときの恰好を見るがいい。長い頸を斜に突き出し丸く背を曲げて胸を凹ましている。まるで病人のようである。しかし刳物台に坐つているときの彼のなんとがっしりしていることよ。彼はまるで獲物を捕った虎のよ

うに刳物台を抑え込んでしまっている。人は彼が聾であつて無類のお人好であることすら忘れてしまふのである。往来へ出て来た彼は、だから機械から外して来たクランクのようなものである。少しばかり恰好の滑稽なのは仕方がないのである。彼は滅多に口を利かない。その代りいつでもこにこしている。おそらくこれが人の好い聾の態度とでもいうのだろう。だから商売は細君まかせである。細君は醜い女であるがしつかり者である。やはりお人好のお婆さんと二人でせつせと盆きょうるしに生漆を塗り戸棚へしまい込む。なにも知らない温泉客が亭主の笑顔から値段の応対を強取しようとしてもするときは、彼女は言うのである。

「この人はちつと眠むがつてるでな……」

これはちつとも可笑しくない！ 彼ら二人は実にいい夫婦なのである。

彼らは家の間の一つを「商人宿」にしている。ここも按摩が住んでいるのである。この「宗さん」という按摩は浄瑠璃屋の常連の一人で、尺八も吹く。木地屋から聞こえて来る尺八は宗さんのひまでいる証拠である。

家の入口には二軒の百姓家が向い合って立っている。家の前庭はひろく砥石といしのように美しい。ダリヤや薔薇ばらが縁を飾っていて、舞台のように街道から築きあげられている。田舎には珍しいダリヤや薔薇だと思つて眺めている人は、そこへこの家の娘が顔を出せばもう一度驚くにちがいない。グレートヘンである。評判の美

人である。彼女は前庭の日なたで繭まゆをにながら、実際グレートヘンのように糸繰車を廻していることがある。そうかと思うと小舎ほどもある枯萱を「背負棒」で背負って山から帰って来ることもある。夜になると弟を連れて温泉へやって来る。すこやかな裸体。まるで希臘ギリシャの水瓶である。エマニユエル・ド・ファツリヤをしてシヤコンヌ舞曲を作らしめよ！

この家はこの娘のためになんとなく幸福そうに見える。一群の鶏も、数匹の白兔も、ダリヤの根方で舌を出している赤犬に至るまで。

しかし向かいの百姓家はそれにひきかえなんとなしに陰気臭い。それは東京へ出て苦学していたその家の二男が最近骨になって帰

つて来たからである。その青年は新聞配達夫をしていた。風邪で死んだというのが肺結核だったらしい。こんな奇麗な前庭を持つている、そのうえ堂々とした^{かけひ}笥の水溜りさえある立派な家の^{せがれ}伴が、何故また新聞の配達夫というようなひどい労働へはいつて行ったのだろう。なんと楽しげな生活がこの溪間にはあるではないか。森林の伐採。杉苗の植付。夏の蔓切。枯萱を刈って山を焼く。春になると^{わらび}蕨^{ふき}の^{とう}臺。夏になると溪を鮎がのぼつて来る。彼らはいちはやく水中眼鏡と鉤針を用意する。瀬や淵へ潜り込む。あがつて来るときは口のなかへ一ぴき、手に一ぴき、針に一ぴき！

そんな溪の水で冷え切った身体は岩間の温泉で温める。馬にさえ「馬の温泉」というものがある。田植で泥塗れになった動物がピ

カピカに光つて街道を帰つてゆく。それからまた晩秋の自然薯じねんじよ掘り。夕方山から土に塗れて帰つて来る彼らを見るがよい。背に二貫三貫の自然薯じねんじよを背負っている。杖にしている木の枝には赤裸はに皮を剥がれた蝮まむしが縛りつけられている。食うのだ。彼らはまた朝早くから四里も五里も山の中の山葵沢わさびざわへ出掛けて行く。櫛ならや櫟くぬぎを切り仆たおして椎茸のぼた木を作る。山葵や椎茸にはどんな水や空気や光線が必要か彼らよりよく知っているものはないのだ。

しかしこんな田園詩イデイルのなかにも生活の鉄則は横たわっている。彼らはなにも「白い手」の嘆賞のためにかくも見事に鎌を使っているのではない。「食えない！」それで村の二男や三男達はどこかよそへ出て行かなければならないのだ。ある者は半島の他の温

泉場で板場になっている。ある者はトラックの運転手をしている。都会へ出て大工や指物師になっている者もある。杉や樺の出る土地柄だからだ。しかしこの百姓家の二男は東京へ出て新聞配達になった。真面目な青年だったそうだ。苦学というからは募集広告の講談社的な偽瞞にひっかかったのにちがいない。それにしても死ぬまで東京にいるとは！ おそらく死に際の幻覚には目にたてて見る塵もない自分の家の前庭や、したり集って来る苔の水が水晶のように美しい^{かけひ}笕の水溜りが彼を悲しませたであろう。これがこの小さな字である。

温泉は街道から幾折れかの石段で溪ぎわまで下りて行かなければならなかった。街道もそこまでは乗合自動車がやって来た。溪もそこまでは——というところし比較が可笑おかしくなるが——鮎あなが上つて来た。そしてその乗合自動車のやって来る起点は、ちょうどまたこの溪の下流のK川が半町ほどの幅になって流れているこの半島の入口の温泉地なのだった。

温泉の浴場は溪ぎわから厚い石とセメントの壁で高く囲まれていた。これは豪雨のときに氾濫する虞おそれの多い溪の水からこの温泉を守る防壁で、片側はその壁、片側は崖の壁で、その上に人々が衣服を脱いだり一服したりする三十畳敷くらいの木造建築がと

りつけてあつた。そしてこれが村の人達の共同の所有になつてゐるセコノタキ温泉なのだった。

浴槽は中で二つに仕切られていた。それは一方が村の人の共同湯に、一方がこの温泉の旅館の客がはいりに来る客湯になつてゐたため、村の人達の湯が広く何十人もはいれるのに反して、客湯はごく狭くそのかわり白いタイルが張つてあつたりした。村の人達の湯にはまた溪ぎわへ出る拱門型に^く切つた出口がその厚い壁の横側にあいていて、湯に漬つて眺めてみると、そのアーチ型の空間を眼の高さにたかまつて白い瀬のたぎりが見え、溪ぎわから差し出ている^{かえて}楓の枝が見え、ときには弾丸のように擦過して行く^{かわう}川鳥の姿が見えた。

断片 三

温泉は街道から幾折にもなった石段で溪の脇まで降りて行かなければならなかった。そこに殺風景な木造の建築がある。その階下が浴場になっていた。

浴場は溪ぎわから石とセメントで築きあげられた部厚な壁を溪に向かつて回めぐらされていた。それは豪雨のために氾濫する虞おそれのある溪の水を防ぐため、溪ぎわへ出る一つの出口がある切りで、その浴場に地下牢のような感じを与えるのに成功していた。

何年か前まではこの温泉もほんの茅かやぶき葺屋根の吹き曝さらしの温泉

で、桜の花も散り込んで来たし、溪の眺めも眺められたし、というのが古くからこの温泉を知っている浴客のいつもの懐旧談であったが、多少牢門じみた感じながら、その溪へ出口のアーチのなかへは溪の楓が枝を差し伸べているのが見えたし、瀬のたぎりの白い高まりが眼の高さに見えたし、時にはそこを弾丸のように擦過してゆく川鳥の姿も見えた。

また壁と壁の支えあげている天井との間のわずかの隙間からは、夜になると星も見えたし、桜の花片だって散り込んで来ないことはなかったし、ときには懸巢かけすの美しい色の羽毛がそこから散り込んで来ることさえあった。

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utiya

校正：二宮知美

1998年12月14日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

温泉

梶井基次郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>